

げっそうてい 月窓亭物語

GESSOUTEI MONOGATARI

1. 建物の由緒

今から200年以上前の1793年、羽生道潔(1768年～1845)が27歳の時に建造。道潔の孫羽生慎翁もこの住宅で茶道・花道などの修業を重ねるが、慎翁は、薩摩・大隅総会頭職、大日本総会頭職などを歴任することにより、鹿児島、東京での生活が中心となっていく。一方、明治時代になると、旧家臣たちは27代守時公を種子島のこの屋敷に迎え入れ、種子島家屋敷とすることになった。以来、平成12年まで種子島家住宅として使用されたが、所有者の転居により西之表市が保存、活用することとなった。

2. 建物ゆかりの人びと 種子島家お屋敷として

「明治19年6月27日守時君幼沖にして依るところ無きを以てす。是に至りて讓藏等、島人らと協議し、守時君をして、しばらく旧臣に依らしめ、その成立を待って以て家運を挽回せんと欲す…(以下省略)」(種子島家譜6巻)

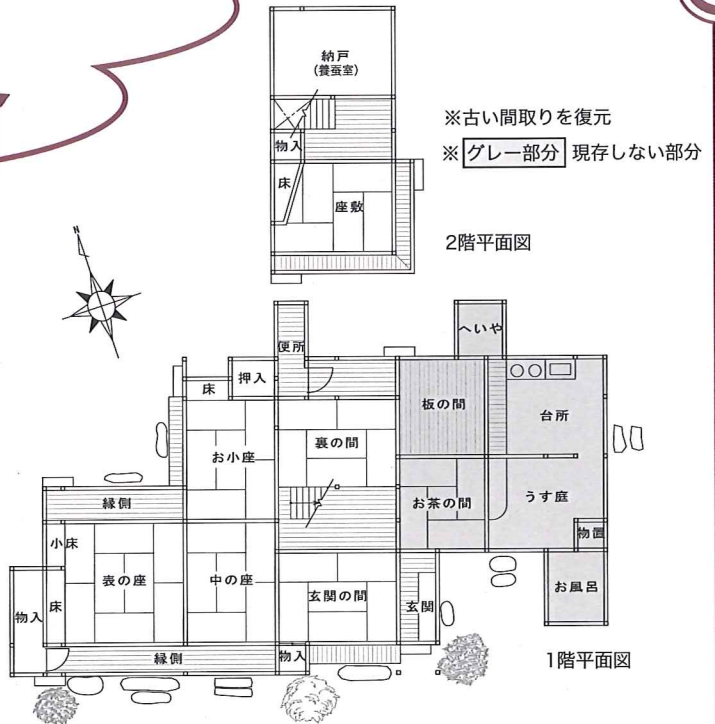


27代 種子島守時公
(1879～1929)

版籍奉還という新しい時代の流れ中で、旧臣前田讓藏を中心とする種子島家加勢集団は、幼少の27代守時君(8歳)を種子島へ迎えるために奔走する。この頃、羽生慎翁は池之坊大日本総会頭職として東京で活躍していたため、明治19年10月31日、慎翁の旧宅に奉迎することとなった。以来、種子島の人々は、この屋敷を「お屋敷」と呼ぶようになり、島の誇りとして心の拠り所となってきた。



27代 守時男爵5年忌祭 (昭和9年頃)



※古い間取りを復元

※グレー部分 現存しない部分

2階平面図

1階平面図

3. 建物ゆかりの人びと 文化の館として

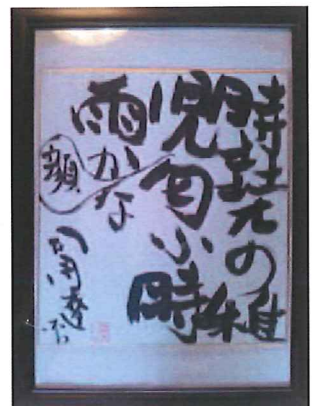
明治19年、種子島家に移り住んだことにより、700有余年の種子島の歴史を綴る種子島家譜類やポルトガル伝来銃、国産第一号銃、生き人形「山野井様」などの宝物が多数保存されてきたことから、数多くの著名人らがこの屋敷を訪れた。



(正面中央)三笠宮寛仁親王殿下
(中央女性)崇仁親王妃百合子殿下(母)

昭和25年4月	作家 林芙美子取材のため来訪
昭和27年(1952)10月28日	下村海南、木村 毅、 吉阪俊蔵(屋久島国立公園審議委員)
昭和38年(1963)10月12日	ピント・ダス・サントス 駐日ポルトガル代理大使
昭和43年(1968)10月1日	アルマンド・マルチンス 駐日ポルトガル大使閣下ご夫妻
昭和45年(1970)5月16日	三笠宮寛仁親王殿下と 崇仁親王妃百合子殿下
昭和45年(1970)5月	奈良本辰也(歴史学者)、高野悦子(作家)
昭和50年(1975)8月28日	司馬遼太郎夫妻ら

「街道をゆく」取材旅行中の、司馬遼太郎一行を招き、歓迎の夕べが開かれた。司馬ご夫妻は島特産の焼酎を快飲し、歌い踊り、夜遅くまで懇談された。一行には沈 寿官夫妻、須田画伯、橋本申一(朝日新聞記者)、同週間朝日記者、野村宏治(読売新聞記者)がいた。この旅行記は朝日新聞社刊「街道をゆく」と題して、刊行されている。



司馬遼太郎直筆の色紙

